

豊明希望チャペル礼拝

2025/6/29

「偶像のところへ」

I コリント人への手紙 12 : 1~3

今日は、第五週と言うこともあり、あるトピックを取り上げさせていただいて、今日の箇所から教えられたいと願っています。あらためて読みます。

「12:1 さて、兄弟たち。御霊の賜物については、私はあなたがたに知らずについてほしくありません。12:2 ご存じのとおり、あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところへ引かれて行きました。12:3 ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。」

とりわけ、2節をあらためて読みます。

「12:2 ご存じのとおり、あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところへ引かれて行きました。」



この手紙は、コリントという、ギリシャの港町にある教会に書かれたものです。パウロの伝道旅行の行程が、描かれている地図ですが、ギリシャのアテネの向かい側にある都市です。

当時、非常に栄えた地域で、ユダヤなどに比べると、大都会でした。ちなみに、この時代から10年後のオリンピックではギリシャのオリンピアで、ネロ皇帝が参加する第211回のオリンピックが開かれています。オリンピアは、コリントからは、今では車だと2時間くらいで行ける距離です。お金持ちが多くて、ローマ市民(自由人)20万人に対して、奴隷50万人という豊かな

ところでした。

しかしそれだけに、コリントは、世俗の誘惑、とりわけお金の誘惑、そして、売春を伴う偶像崇拝の誘惑の町でした。クリスチャンは、お金か、神さまかを選択しなければならぬ、お金がすべての価値観の中心にありました。

コリントの教会は、そんな世の中で、引かれるままに、世の中に流されるままに、お金一番で生きていた人が、クリスチャンとなって、お金より神さまだと価値観を見いだした人たちだったのです。

私たちが、この世の価値観の中で、お金が一番と思っている人が大多数かもし



れません。そんな中で、現代に生きる私たちが、イエス様を信じること、神を信じるということはどういうことなのでしょう。

さて、今日は、**石井十次**という人を紹介させて欲しいのです。岡山に生まれ、この人は「児童福祉の父」と呼ばれ、児童福祉に関わる人は、必ず教科書で学ばなければならない人です。

彼は、医者としての試験に受かるも、聖書に出会い、イエス様に出会って、大きく人生を大きく方向転換しました。児童福祉に一生をささげたのです。親戚や多くの人から反対されますが、彼の心の中では、立身出世よりも、大切な価値観を聖書から見いだしたのです。後から、彼の生きる信条、憲法をご紹介します。



岡山倉敷にある、大原美術館を、ご存じでしょうか。ルノアールをはじめ、たくさんのお宝は、圧巻です。また、倉敷毛織(現：クラボウ)の創業者です。大富豪の跡継ぎとして生まれ、一時は、放蕩に身をもち崩し、謹慎中に、この石井十次に影響を受け、洗礼を受けてクリスチャンとなり、石井十次の紹介による石井の親戚の娘と結婚をするほどに親交を深めます。聖書から学ぶ倉敷日曜講演を開催し、多くの牧師やクリスチャンを招き、貧しい工員たちに福音を伝えます。



いつか、彼についてももっと詳しく取り上げられたらとも思いますが、まさに、石井十次から影響を受けて、お金より愛、事業より福祉と、人生の選択をした人であります。石井十次の始めた孤児院(1906年東北冷害飢饉の時の孤児たち)を、石井召天の後には、彼が受け継ぐこととなります。

もう一人の、この世の価値観から神様を信じて、お金よりも、聖書の生き方と決断した人は、今年(2025年)の1月に亡くなった、**山田火砂子**さんです。今年1月には、東京の淀橋教会で葬儀が行われました。ちなみに、その時、私が以前、喬木村の青年の主人公にした映画を紹介しましたが、俳優の渡辺いっけいが、参列し、葬儀で、挨拶をしておられます。



この時、司式された牧師は、私の結婚の時の証人である峯野牧師ですが、葬儀の時、彼女の考え方、生き方をこのように紹介されました。

「混沌とした闇の時代、光を当てて方向を示す羅針盤は『愛』だと確信しています。とりわけ未来を担う子供たちには、大切な問題で『愛なくして何がある』それを伝えたくて、次々に映画を作ってきた。」と。

彼女は、映画監督ですが、その晩年 72 才のときに、人生ではじめての監督作品、それが、まさにこの石井十次の生涯を描いた作品をつくったのです。



『石井のおとうさんありがとう 岡山孤児院・石井十次の生涯』

さて、このように多くの人に影響を与え、クリスチャンの生き方を左右した、そんな信仰者であった石井十次の生き方について、最後にもう少しご紹介します。

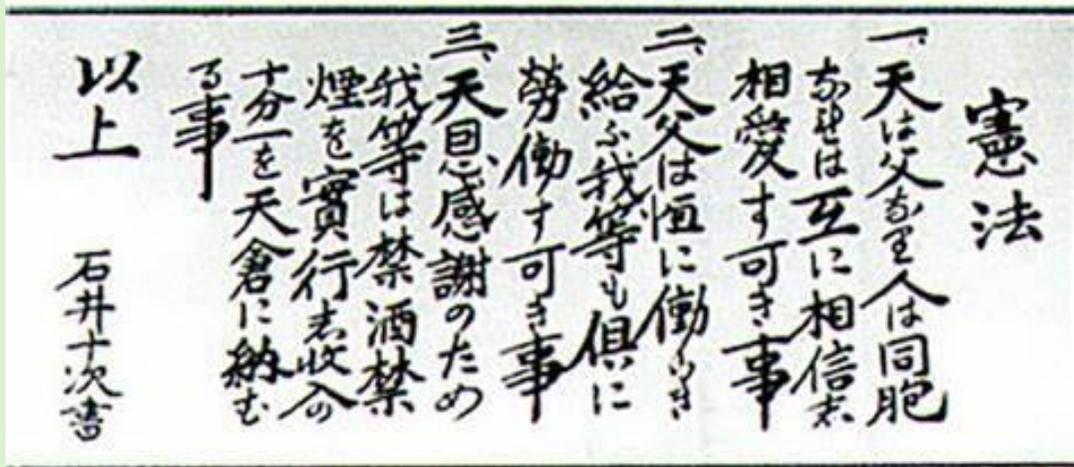
彼の紹介文では、「岡山で医師を目指して、岡山医学校（現在の岡山大学医学部）の医学生として研修中であつたが、生活に困窮する母親から子どもを預かったことをきっかけに孤児教育会を設立する。その後、預かる子どもの数が増え、育児事業に専念するために医師として働くことを断念した。そして、英国のキリスト者のジョージ・ミュラーをモデルにして、キリスト教信仰に根ざした岡山孤児院を創設して、生涯を孤児救済に捧げた。」となります。



江戸時代の終わり、幕末 1865 年に生まれ、明治 15 年に医学校に入学するも、明治 17 年、17 才で洗礼を受けると、次第に、町に溢れる孤児たちに思いを寄せ、医師の道を捨て、福祉の道に全力を注ぎます。

48 才で召されるまで、生涯、その働きに尽くしました。

彼の考え方、生き方を表す書が残っております。このような書です。



「一、天は父なり、人は同胞なれば、互いに相(あい)信じ相愛(あいあい)すべきこと

二、天父は恒(つね)に働き給ふ、我等も俱(とも)に労働すべき

三、天恩感謝のため、我等は禁酒禁煙を實行(じっこう)し、収入の十分の一を天倉(天の倉)に納むること」

神を父とする信仰者は、人は、すなわち、父の子供たち、兄弟姉妹だから、愛するのが当たり前というのです。同じように、天の父なる神様が、天地万物を創造し、今も、まどろむことも眠ることもなく、私たちに寄り添い、守り導いて下さる。(詩篇「121:1 私は山に向かって目を上げる。私の助けはどこから来るのか。121:2 私の助けは【主】から来る。天地を造られたお方から。121:3 主はあなたの足をよろけさせずあなたを守る方はまどろむこともない。121:4 見よイスラエルを守る方はまどろむこともなく眠ることもない。」)

そして、最後に、感謝をあらわし、まさに、コリント人への今日のパウロの手紙のように、偶像、そして放蕩に身をゆだねず、それなら神さまにそのお金を捧げなさいというのです。

さて、聖書に帰りますが、2 節。「12:2 ご存じのとおり、あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところに引かれて行きました。」の御言葉を少し詳しく見ますが、「・・・引かれて行った」「誘われた」と同じような意味の言葉を繰り返しますが、コリントのクリスチャンの前の状態は、彼らは、偶像と偶像を取り巻く道徳の腐敗、お金の力による心がすさんでいったといっているのですが、それが、私たちが抵抗できない、抵抗する事がきわめて困難な、悪魔の力というべきか、そういうものに引かれていき、抜け出ることが出来なくなっていた。かつてはそういう生活をしていたと、パウロが彼らに言うのです。

「引かれていった」たしかに、何者かのちからによって引かれていくことがあ

るのかも知れません。

以前、私が、沖縄に伝道集会に招かれて行かせていただいたとき、出てくる体験談はすさまじいものでした。ある高校生は、「授業中に、何者かが耳元でささやくのです。」と言うのです。その声に導かれていくと、島の崖の頂上まで連れて行かれて、また耳元で聞こえてくるのです。「飛び降りなさい」と。そこは、戦争中、多くの人たちが敵に追われて自殺した崖でした。「イエス様を信じてそういう事がなくなりました。」と。

私たちには見えないだけで、そういう抗しえない力？別の言い方で言えば、罪の力は、私たちが逆らえないほど、力が強いと言うことであります。

たしかに、テレビをつければ、お金が一番です。この世の中に良い悪いという事、善悪はない。あるいはあったとしても、私たちの人生にとって、正しいか正しくないかが大切ではなく、気持がいいか不快であるかが大切です。善悪ではなくて快か不快か、そういう基準で決めている。罪は、耳元でささやくのです。人が見ていなければ、ばれなければ、何をやってもいい。

それが悪魔の力だと言うなら、今でも確実にあると思います。そして以前よりももっと巧妙で、あらゆる手を尽くして、テレビやインターネットや、携帯電話で、あらゆる方法を通して、私達に迫っていると思います。

「引かれて行った所は、ものを言わない偶像の所でした」とあります。

お金か神かと最初に言いましたが、聖書の中では、お金のことをマモン(ヘブル語:アラム語)とよびます。シリア語でも、「富」「金銭」を意味しますが、マモンは、人格をもっており、彼マモンは、金塊が一杯入った袋を両手で抱えた老人の姿で現れます。そして、呼び出した人の金銭に関する欲望をかなえるのです。しかし、その代わりに人の魂を抜くとされるのです。

お金は、無機質であります。まるで人格をもったように、人間の心に働きかけるといふのです。

多くのこの世の物は、実は、神様が私達に与えてくださったものです。身の回りを見回してみると、この空気もそう、水も、また、このなぜか動いている心臓も、命も、神さまからのものです。実は、驚くべき祝福の神様からいただいた物にあふれているのです。しかし、人は、なぜか、目の前のマモン(お金)を第一にしようとします。まさにマモンが、私達の目を狂わせているのです。

沖縄の話してはありますが、悪魔が、私達を引いて行こうとしているのです。私たちは、人生の考え方、価値観を変えなければならないのです。お金か、神か、神をとると。その結果として、天地万物をつくって下さった神さまが、すべてのものを添えて与えて下さる、そういう価値観に変えなければならないのです。

マタイの福音書「**6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのもの(6:31「食べる、飲む、着る」のお金と生活)はすべて、それに加えて与えられます。6:34 ですから、明日のことまで心配しなくてよいのです。明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります。」**

さて、神さまの存在をまず信じ、そして、この神さまが私たちを愛しておられる印としてひとり子イエス・キリストを、私たちの罪を贖う、救いのために与えて下さったという福音を、受け入れ、信じ、お金や物ではなく、まずは、神さま、この真理に従って、それでこそ得られる本当の幸せを、これからの人生を歩んで欲しいと思います。

石井十次と、それに影響を受けて人生を、ある人は、大金持ちの家に生まれたが、その生き方を変えられ、神を信じ、福祉に生きた、ある人は、自分の映画製作の溢れる賜物を、神さまのためにこそ使おう、あの牧師がおっしゃったように、愛にこそささげようと生きたと言われる生涯にした人を見ました。

あなたも、今週の歩み。主を信じる者も、これから主を信じたいと願う者も、主、すなわち神をこそ、イエス・キリストこそ、信じ、お金でも自分でもなく、神にこそたよって生きると決めて、ここから歩みたいと願うのです。